



俳諧一葉集

後編

一









あつむ向不てと人ぬりそせしるき

何りし千里とまけははるのそめたけとあつむ  
心もつてくし竹の葉 真運のわしう深く  
此人 朋友より竹の葉

深川やまき運もそ不二河のけゆく 千里

不盡川のいよとせゆと三けつあつむ  
位あり深川のふ瀬をかけし浮き波をまのく  
くうのたあまのりてけ置けはふれ  
やちるふれあまきほとんと秋の風を  
秋の風をまのりてけ置けはふれ

猿もあつむ人けまのり 秋の風をまのり

いよとせやあつむ父の情れと母の情れと  
あつむし母の情れと母の情れと父の情れと

はるあつむをまのり

大舟川をまのりてけ置けはふれ

秋のふれ向はるすゆのねん大舟川 千里

上上の吟

そのもては本狩はるすゆのねん

廿二河のあつむ月かまのりてけ置けはふれ  
秋のふれ向はるすゆのねん大舟川  
中山のふれ向はるすゆのねん

あつむのあつむ 秋のふれ向はるすゆのねん

秋のふれ向はるすゆのねん 大舟川  
あつむのあつむ 秋のふれ向はるすゆのねん  
あつむのあつむ 秋のふれ向はるすゆのねん



赤伊予のついでに... 神奈川入... 多摩川のけけのら... 峰の松風... 三十一... あり吉の棟...

牛阿の女... 女阿の娘...

閑人の茶合...

下野植子...

長月のけめ... 子ねし何事... 子と命... くるく母の白髪...

あまのこは...

二上... 二上... 二上...

二上... 二上... 二上... 二上... 二上...







大垣より帰るに松の木因り家をこまめにしりておし一軒をた  
つたきふしをたふし思ひて松をけれい

死やきぬ松のたふし松のたれ  
葉名お富ちうし

み牡丹まきよきおほしきん  
その秋より病癒すまてわのうま中上流の方をわ

ゆけけのやき真白ふるり一寸  
熟田子信の社殿大り松を築てかかれて学術

かくつらうと強き小社の信を志ししに松をたふ  
てそ松と名のつたまのたふしをたふし

めし度うとふしう  
まめふきく松く餅ふやううれ

名護屋より入るその松と松

ね白右ふしに松のたふし  
その松大も志しうよしに松

市人よこの松を  
旅人もん

うまきふしに松のたふし

海をたふしに松のたふし

海をたふしに松のたふし  
うまきふしに松のたふし  
うまきふしに松のたふし

手くねおまきし学難をたふし



と山あふ年をこころ

清舞了る岩乃事餅林の玉のこ

念ふにやそのはな

まをれやるをふ山の節のうら

二月あふ花

水取や水の信は昔の和

高の上うら三野秋の写流の山をを訪

梅林

く矢白しきのふや朝をぬりやれ

櫃の本の花うがふぬすのこり

伏見西岸古任口上人の海

衣衣う伏見の柳、素きよ

大徳寺の山道

山道まう何やうゆりすれ

物名記

かきさねの杉をちりり

倉の物うひも松原の橋をうけ

はしりいけさうけう干籠さく女

吟行

業をうけう知えうわさすめ

水けを世事をけう古人の色

命あふの中へ活らる橋のれ

伊豆の城の古門を古事の秋うけ

高をうけう古の枕のそつと尾張



ひまわりけれハ

ひまわりけれハ 種まきくろくろん 子枕

此種多し昔之言高覺寺の大願の者なり 此月のけれハ  
此化し多し昔之言高覺寺の大願の者なり 此月のけれハ  
其角子(一)つ(一)つ

梅毛く卯の毛を(一)玉(一)あ(一)し(一)る(一)れ

・ 野杜玉

白け(一)し(一)の(一)卯(一)毛(一)く(一)梅(一)毛(一)か(一)し(一)る(一)れ

二(一)つ(一)の(一)桐(一)葉(一)子(一)の(一)種(一)ま(一)き(一)く(一)ろ(一)く(一)ろ(一)ん(一)子(一)枕(一)ハ

牡丹葉深く(一)け(一)れ(一)の(一)梅(一)毛(一)ハ

甲斐の山中(一)の(一)之(一)つ(一)ろ(一)く

ゆ(一)く(一)駒(一)毛(一)を(一)ま(一)き(一)く(一)き(一)む(一)く(一)ろ(一)く(一)ろ(一)ん(一)子(一)枕(一)ハ

卯月の葉(一)を(一)種(一)ま(一)き(一)く(一)ろ(一)く(一)ろ(一)ん(一)子(一)枕(一)ハ

多(一)く(一)の(一)葉(一)を(一)種(一)ま(一)き(一)く(一)ろ(一)く(一)ろ(一)ん(一)子(一)枕(一)ハ











ぬくくや石のおやの昔のな  
縁ありやがさきく来のを

宗波  
曾良

田家

かろけい田圃の都や里の秋  
夜向うに赤やとれん里れ月  
魁の子や穉すうけさ月をさる  
芽の葉や有さの里れ焼さけ

柳青  
宗波  
柳青

野

もひをや一花すうけ秋こそと  
あつ秋字さういゆく時るうさ  
秋るや一花ハヤとさ山のた  
雨は自峰のた

曾良  
柳青

樹をよまう千石の友さ  
秋をさめうさくわのさ  
有んくしひふのさる舟とえ

松江  
柳青  
曾良

貞享丁卯仲秋末五日



















伊勢山田

何れ木の花と見えしは

裸よりハキリと見えしは

菩提山

け山は此にさきよ

龍尚舎

物のつらきまのり

彌代民部

梅の木より見えしは

学虎舎

芋植と門を

神垣のくらし梅一本

月夜より見えしは

おもしろい

神垣や

やういふ

ひく枝

ひく古

旅行の

たつた

くま

れ下

乾坤











又の風程の人多し何の事なるか  
古めりかかたぬとて人の世に出る  
つとてかたあはれはるるに足却る  
中の玉を指し泥中より  
人々かたむくおまじり又これ  
更衣

ひの段さるるにぬく  
よしゆわく布も愛も  
澄佛の白ハ衣言し  
さ此よりおしんも

澄仁のゆり  
折提寺經云和尚本約の対船中七十餘度の難を  
きひたまひ

沙月の中は風火入る  
その榮しは沙月の  
旧友もを良しとわす

まの角さるるに  
大坂よりゆ人の許

葦子ふか  
波ナ

月ハゆめを  
月尺も  
お月中は  
さるるに  
東も海の方







のはしほのこゝろのふしのねとわさき赤心道の拙をこゝろ  
 のしほのこゝろのふしのねとわさき赤心道の拙をこゝろ  
 こゝろのふしのねとわさき赤心道の拙をこゝろ  
 尾上つとき丹波の海かきふさりし新保のそき逆さかおき  
 るききさきのふしのねとわさき赤心道の拙をこゝろ  
 月のつぎはつきのふしのねとわさき赤心道の拙をこゝろ  
 うのつぎはつきのふしのねとわさき赤心道の拙をこゝろ  
 女流のゆきさき赤心道の拙をこゝろ  
 りさき赤心道の拙をこゝろ  
 あつきのふしのねとわさき赤心道の拙をこゝろ

入世のふしのねとわさき赤心道の拙をこゝろ  
 此歌をよみしつゝ子業のうらみこゝろのふしのねとわさき赤心道の  
 拙をこゝろ











あけみみく大根かきし秋の風  
木石の縁うき世の人北ち度うま  
さつさつおらうはくさく木石の秋  
善光寺  
月影や四門白雲も思ひとら  
吹飛すうるる海百は世もくれ

おくのわろを

月りる百代の過客うらぐゆふふ手と又旅人き舟の上  
生涯をうらぐのほくく老とあふものばく旅うら  
旅をすうらう古人とあはれ旅り現きううらうつれ  
手うらうやの風うさううれく源伯の心やまは海原う  
さうらう十年の秋は上北破屋の古葉をうらうらう  
くこれまきうの雲の守りきう川の岸うらうらう  
物うつあてやとくうらうをそ組神のまひやうらう  
まうはくう殺引の破孔もはくう望の秋けうらう三里う  
すうらうらう松島の月さうらうやうらうらう方八人う  
風うらうらううらうに

雪の戸も ぼろく代了ひあのか



向八分を度の様子うけ置やまひと事れ七ののち極  
と一二月にふりしきりてさすれものり不二のまかす  
うり尺に上野倉中の花の梢中いひつれをいむを  
まきかあうの青よりけしひら舟子けりてさすま  
うまに舟をぬれ八あまにさのさの綱子さすりてあ  
かに静家のほきさす

ゆくまやも一魚は月をふりて

これと夫立はくしめとゆくをけすは人いハ  
中らまあひてはなげの尺ゆかすはくはさす  
と一え深こくさや其相長まのり御しかつれを  
まこ同子尺ぬさすひりさすゆかすはくはさす  
まこ同子尺ぬさすひりさすゆかすはくはさす

まこりけきるの早加のさすはくはさすはくはさす  
これと物先共むらさすはくはさすはくはさす  
よの功きゆくしめはさすはくはさすはくはさす  
志しはさすはくはさすはくはさすはくはさす  
まこりけきるの早加のさすはくはさすはくはさす

まの八高り指す同行曾さくはくはさすはくはさす  
と一了て富士一辨に各戸さすはくはさすはくはさす  
出火のみてせれすひりさすはくはさすはくはさす  
あはり一けりてはくはさすはくはさすはくはさす  
者子けりてはくはさすはくはさすはくはさす

妙なり支山の林庵に泊るゆりてはくはさすはくはさす  
まの八高り指す同行曾さくはくはさすはくはさす  
と一了て富士一辨に各戸さすはくはさすはくはさす  
出火のみてせれすひりさすはくはさすはくはさす  
あはり一けりてはくはさすはくはさすはくはさす  
者子けりてはくはさすはくはさすはくはさす



打ぬき休しめしむる事あり併の湯毒毒ちり示現しつゆ  
 京門の乞食明礼して人の人そなたはけりやとやとやのふす  
 りのふすをいふとあそびんを品を習せふふしして二直備固此  
 くのふす割穀本納の仁にららふふふのふす稟の信賢むる  
 下

お月影のゆふゆ消ぬすは昔はゆふを二荒山とせしを  
 古海大沙運基の時日光とゆふと久きふふ未未とささる  
 りふふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 安流の極おふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 何ふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

思致山ハ愛しつてまひゆふゆふゆふ  
 別拵と思致山ハゆふゆふゆふゆふ  
 曾良

曾良ハ何念やうして思ふ事とゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 予は新水の芳とたふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 しては悦び且ハ野村の影をゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 思はゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 山のゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

二十餘丁山をのちうて思ふ事とゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 岩の壁潭中をゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 此ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

志はゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 此次の思ふ事とたふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 直そとゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 日暮る豊美のちゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ







五丁山にたぐりけしきし言をえりしと松敷くろく昔志  
しとてう卯月かたしむきやう十景たふお松を懐て山間八  
さしかの法をいひくの後いふやと好の山とちのむれ八石上は  
小庵若窟と結ひつけらぬ源少の死葬はちしは少の石を  
んくし

本塚く危を修しけしと木を

と云はぬ一旬を植す結し修しうれり殺せり石をゆく  
能代よりうきまゝ運つる時口付のきのと徳無き言をよとて  
やききりてまゝ修すものぞれ

神をも横りてしんむけよ修し

殺生石を源泉の物と山くけしめり石の毒を言ひてちんぬ  
障障のたぐひ支妙のきけ尺一ぬにしかさきり死す又法

いふあうしは物ハ芦花の里をりしと田の畔に修す此寺の歌  
か戸歌某のけ物尺をくや外をまらしこのこよひか  
いひくは修しとやと修しをくよは物といけりて  
しんむけ

田一板 植すちらさき 柳

心許まふ多ぬかきぬるやにきり川の岸にかりて松んさ  
すぬいし修すもまらぬしんむけしんむけしんむけ  
岸ハ三園の二より風語の人心をくむ秋風を耳に結し  
紅衣をを修すく青葉の梢にゆれぬる卯のむし助  
流の花は咲きひて雪をくらぬる心修す古入前をく  
衣修すをりしんむけしんむけと清濁の言をくぬむ  
くのちをかきしんむけのくぬむ 骨良











しんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしめ  
付れよよそあそふたこえやうしんしんしんしんしんしんしんしん  
たおしあれしんしん

まじしんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしめ

岩浜しんりあし

武隈の松しんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしめ  
れろむろの松しんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしめ  
おほきあつめしるすいしりしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ  
松しんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ  
後しんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ  
おろしんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ  
たけしんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ

おれしんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ

松しんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ

名水川を渡して松しんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ  
田上を渡るすいしりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ  
とびし知人のあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ  
おろしんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ  
やうしんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ  
松の林しんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ  
おろしんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ  
おろしんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ  
且辨の松しんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ  
玉て松しんりあしをきしゆはひのたしめしるすいしりしめしるすいしりしめしるすいしりしめしめ































君より贈物の手紙をいへ

波にこゝぬおるしあつてわみさくは家 曾良

酒田の多崎りやをなねこ小陸をよのやうに定むるこゝの思ひ  
胸にいつかたし矢くか架の府まじ百三十里しわの嵐の舟  
とこのゆき八坂存の地すゆゆをゆくゆか中五一あり  
お寄るおるは百れは若澤の芳に神をまやま一病者で  
るゆき記さす

又月やありと孝の杖をいへ

何れ海や休渡す杖よ天何

り六親しる子しは犬もゆく物之しおとよおふ一の  
影あをこつてつれ侍ハ杖引よとて病者る一白瑞  
阿の方こそつれ女のお二人とつてゆゆゆ先づとよの

こむかふも父く物汗すもをきけハ杖存不新侍とよ和  
の遊女ありし侍お老言すしして武弁すしをのこふ送る  
あすハ古いし之す又きこめははつれおと侍れしむわ  
あり志く波のよすらけとあをこるや一ゆ月の子れを  
あきりしつらつてささいぬおおてく白くは葉因ふの  
侍れれしよものあをゆめしは物入るゆゆ杖立子香こ  
子むうひさゆと急しぬ旅路のうさゆゆと急おのり也  
しく侍れハ尺しゆれも侍法をまじハ侍ん衣のしハ  
侍情ハ大急のめくしをいれさ弦路をさせと侍を  
首す不使のしよと侍れもさあしハ侍ししよと侍  
おのり一人のゆくにわをてゆく一神ゆのか護つる  
なつてしよと侍れもさあしハ侍ししよと侍し



一かき世女とぬくく暮る月

曾良とかれはせとぬけりくろ廻四十八の瀬とくやぬく  
ぬ川もくくくくく水古とく海子とぬ霧の夜浪八音あふけ  
くも初秋の衣とくくくくくく人くあられはくくくく五里  
候つくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
せくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

卯の志山くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
大坂くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
一かき世女とぬくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ゆきもつたてふふれく

秋すくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

色中金

あくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

小ねくくくく

志保くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

此書左田の神社に清原重光の甲斐のきれ何の地号源光が  
属き一対義約とくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく







停るも残魂をうへ陽のまをさしわひ来りおそる庭中へ  
極られハ

庭掃るやや寺子らッ 柳

ふゆのぬき片々子難ありうまげの城赤の境吉崎の入口  
を舟子梅さして以越の松を君めめ

取すすのうらなや 波をよこそんそッ、

なをこしんれらら びッーの松 西行

は一そくし原系書さうも一辨をいあつものハ常用の指  
をさつとッ

丸石を新寺の長老古ふ因りれハ君ぬ又兼河の小枝  
もの徳和子尺送くは書かもし志しひ来つ雪この風系さ  
さつとッひつけさおそやれあつ化意外ハあつ改つ

こころをさみ

物古く扇引さく好波のれ

又ナ下山と入て永平寺を礼す是久保の寺寺し邦探り里を  
廻てかうふけは法をあしめつ貴ふんこつや福井を  
三里けつたれハ飯志とめてやうはとぬのさるもん  
こにや我ハ古く治士あつあつぬの寺ははるもあつと  
あめおすさるあつとつゝ先さるひてあつや將死  
とやと人さあねわれ心す存命しとそこもさる地市中  
そつと引入てあやハふあつと系瓜のそとつとつとつと  
きにはたつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
けあつ女のあつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
アあつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと



















種子とさみみさうけのりーらと捨をいもさかひ若  
常のくろくも雨おのりもさし風千ひさくーんさ  
け人のちえうーるめくさ

枝の花のくろくも似よ木さの松  
くき人れ松くーもさく木さの随

海六さあの一白一決定すんふーもれくおとと滅存の  
かさみ二ふくさくはさー

送信尊吟辞

杖改千宗龍さくけささのうらさなをめくさくさく入保六  
幸やうふのけい信もけ武江の東原川の草鹿をひさく  
既千一歩をさくーもさくまぬけ信尊の風移とこの一市を

趣さ幸し斗藪け御の身とめくさー又竹あ懸思  
諸んとささかおの懸さくーもさくさくは備さくさ  
さあのみ言千翅さくさくさくさくさくさくさくさく  
中の身懸いさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
うれさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
かのーもさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
まのけくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
勢の毛れくるさくさくさくさくさくさく

既守賦

空月の跡無さくさくさくさくさくさくさくさくさく







鳥賦

一鳥小大ありて居も其まのう小も鳥鶴といひ大もは角た  
 とくはひる及哺の若も懐くとも中の骨子とけく成は  
 人たあゆく人そつり記はる翅もあつく二星の蝶と  
 けれり成は大事のやくも知し其のなをさくもさるも  
 らくもいひくもあかしのあきもあけりもあかぬあき  
 ゆくた人てく詩歌の才と情のまといひ外 情のまをれ  
 かちちもあきり只食粒の中より対にけは大き又は死を  
 うもあつ対をけは少く 一も害も大し此中かの骨角たハ  
 性倚強もあきく結の翅もあけく 一も骨の爪のまをて  
 もおそれれ肉は骨の味もあけくあきく骨のまをて

啼対を人不可の音を抱くもあきく凶事をもひひて愁を  
 むくふ里をゆくくは憂鬱の積をゆく 一も雨のまをてく田畑  
 を耕くも 一も 辛苦の労を 一も 一もあきく 一もあきく  
 りみ地の地をゆく人のもをちち牛馬の行をゆくも  
 て路をゆくはあきくいのちをゆくもあきく 一もあきく 一もあきく  
 ちちもあきく 一もあきく 一もあきく 一もあきく 一もあきく  
 さるあきく 一もあきく 一もあきく 一もあきく 一もあきく  
 後くる人ゆくゆくはあきく 一もあきく 一もあきく 一もあきく  
 もあきく 一もあきく 一もあきく 一もあきく 一もあきく  
 三足り金鳥の飛をゆく人てあき

笠張祝























かゝりけりてきこふる又もきこふて原へきこふてそふる  
そふりけりてきこふる原へきこふる

海の色はいくつものよふよふの色

自得箴

ふくふくふくふくふくふくふくふくふくふく  
行へ

かゝりてふ人の色も入ん手の手

札録

間もつれぬ杖をうけし暗き火の音をや  
間もつれぬ杖をうけし暗き火の音をや

静なる時、筆をとらして、筆裁、喜の方寸に入らぬ、  
かつき一物之用を多きとく、さき八寸おもしろ、二尺高、  
つれづれ三の刺を解き、うして、潜就、牝馬の鼻、  
これや、ゆけて、一用とせんや、又二用とせんや

旅業ふれ

え深仲を、世道

度右録

人の徳をいふ、これ、徳の徳のれ、去を、説く、  
徳の徳をいふ、これ、徳の徳のれ、去を、説く、

張白

もの、い、ハ、度、き、中、秋、の、色

孤之録

山素書



一 孤重黛山 自笑梅箕山  
莫懷首陽餓 遠中飯穎山

款公のかたけを生きかたみまゆぶらゑ子つとよけり  
ゆりてあまのつひのひまこも是をたぐみりつけり  
入る意をせんはれはたしこのつひのひまこも  
つとて海をもよひはれはたしこのつひのひまこも  
夢虎のひまこもつとて海をもよひはれはたし  
心ゆりてあまのつひのひまこも是をたぐみり  
たしむせこもあまのつひのひまこも是をたぐみり  
つとて海をもよひはれはたしこのつひのひまこも  
李白のつひのひまこも是をたぐみり

きつとてあまのつひのひまこも是をたぐみり  
李白のつひのひまこも是をたぐみり  
つとて海をもよひはれはたしこのつひのひまこも

極古解

つとて海をもよひはれはたしこのつひのひまこも  
李白のつひのひまこも是をたぐみり  
つとて海をもよひはれはたしこのつひのひまこも



鄙言 白の

おもむきもあつきのけさるを信は信のたてあふらうらう  
是し

つこころ致非よはうてか人かう人かうあふれあふらう

興義人文

大和心長尾の里のいふあふのまきうらる新きまのゆふのいふ  
しこころをいふあふのいふあふのいふあふのいふあふのいふ  
あふのいふあふのいふあふのいふあふのいふあふのいふ  
石を揮しハ通茶のまきあふのいふあふのいふあふのいふ  
お母子つづくあふのいふあふのいふあふのいふあふのいふ

しこころをいふあふのいふあふのいふあふのいふあふのいふ  
あふのいふあふのいふあふのいふあふのいふあふのいふ

あふのいふあふのいふあふのいふあふのいふあふのいふ

吊初秋七日雨星文

え解六文有七日の秋風や天子さう白浪浪海の音をい  
しこころをいふあふのいふあふのいふあふのいふあふのいふ  
二星のを飛ぶあふのいふあふのいふあふのいふあふのいふ  
あふのいふあふのいふあふのいふあふのいふあふのいふ  
する人まらあふのいふあふのいふあふのいふあふのいふ  
あふのいふあふのいふあふのいふあふのいふあふのいふ

あふのいふあふのいふあふのいふあふのいふあふのいふ











所へたるかまひかまうた床のほろろきし種々なるもの  
さうしものむとかがみこしと大余妙典の甚うあつた  
一対磨を言ひて恒の産しと木の何某の甲より清然  
をえりて釜魚龍を名の懸さくおとさぬてそはるいふ  
て名ゆのふを破る杖を折て業をすつ既より十年の  
けりめし市店をひ片りかへてこのし心なるとを放る  
れをさくぬて十年のすまひ車とてほり  
ゆ上り生れて赤野の跡をさく是れ大谷お市の人  
る

入月の法ハ机 此四隅に丸

為茶録

金華を傳へて教へるゆがさるハ士の志し又徳を傳へる  
さくともし果子のしは伝へてすね合ふる言ハ義を傳へ  
わして實を傳へる先莊をるんハ心すけり風流を  
肺肝のすまひをけりしとらふいしととをりさく  
ぬとさくわいしとをけりしとをりさく  
法をさくわいしとを先母をるんハ種々をけりしと  
いふて若はりたしとさくねて茶傳のすまひとをりさく  
やうやうしとて手仲秋中の二日ゆ井垂ぼのほろり  
月をさくわいしと種々を傳へるさくわいしと  
しとて既よりさくわいしとて廿七の夜のとほり  
年の母りさくわいしと七葉の種をさくわいしと  
むす歌の五十年とてさくわいしと公のおまはる























松阿の言を九尺たうの枝さしわりの一又餘枝上んをか  
さの昔葉を森とてさくわくし風牙をゆやうのちをさくひはを起  
す公算子似菊を以て散り似て浪の波をさくく高射牡丹をおき  
る人壽出を阿つたて他を似てく菊を似てく人示菊を似て  
人千阿さくふ折木柑散るを似てく尺く枝葉のからを似て  
吟相ひさくちお海をさく阿射を似てくさくしけしきを  
くくく楽天曰松よく鷹音を吐かす葉を似てくま人貝を  
よるさくし心を慰すよのみゆゆん長生保善の音歌を  
似てく中川を似てくさくし

元禄四年仲秋日

文淵舎に於

嗟哉日記

元禄四年卯月十八日頃晴を遊ひて吉本より柿屋を去り凡北  
とて吉本より吉本におよびて京の隅を予を於て居るくくく  
きくくし子つくくきくくくくくくくくくくくくくくくく  
休まざるむ 机一硯 文庫 白氏文集 本約一人一有  
去後物語 源也物語 去休も記 松葉集を置いたの前  
張きくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
たくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
象もくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
十九日半臨川寺に詣つ大井川ありありくくくくくくくく



仕尾の里をけりけり 庭を苑と請ふ人ゆわくひおけり 松の尾林  
 の中へ不智屋一きまのふゆすくすく 上の庭の三所ありけり  
 ねらふふふふんかの仲子 約と交るる 雲とくし 約と女の橋とく  
 べりけり 侍れは志らくくこれらふふふふふふふふふふふふふふ  
 葦の中をゆき 志らくく 橋とく けり かくと 務結の庭の  
 上り起中へ 幾手敷中の 庭若くふれり 昭君村の 柳屋  
 女席の 衣は ちりちり ちりちり

へんふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 風ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

斜る及て首林をく 詢ん 妃系より 本より 吉本より 詢ん  
 育より けり

廿日 水曜日の ぬふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
 首林をハ けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
 石塔 松と 葎のふふ けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
 けり けり けり けり

柚の香や ちり ちり 志のらん 料理の方  
 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
 ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

吉本見の方より 葎を 酒業のもの けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり



曉ちふふかき新のうきすの友ん北のあふ所へ二馬の故  
屋へ回玉の人かへりおひふくむくさうて又四くさくも  
折ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
古末程とてかた

廿一日唯板の病さうけさふむくく定のけいさうて  
似れ程さうあふふふふふふふふふふふふふふふふ  
そらふ及ふ古末程とてかた人かへり登明ふれかた  
きぬかたにわ位程もさ折ふふあふさうてさうて  
に情書す

廿二日釣の方雨降るふ人かへりさうてかたにわさうて  
遊小女詞  
妻にほるものいほへりさうてさうて

酒を飲みのいほへりさうてさうて

愁にほるものいほへりさうてさうて

境無にほるものいほへりさうてさうて

さうてさうてさうてさうてさうてさうてさうてさうて

さうてさうて

ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

智すもほりかたさうてさうてさうてさうてさうてさうて

是にほるものいほへりさうてさうてさうてさうてさうて

むふふ又

さうてさうてさうてさうてさうてさうてさうてさうて

とさゆり寺の智席へさうてさうてさうてさうてさうてさうて

乙卯武江さうてさうてさうてさうてさうてさうてさうて







枝既今久赤虬印 青葉く既堪乎昔

る小督墳

強撓懇情出深言 一輪秋月野村風

昔季侯は取巻韻 何處孤墳竹樹中

芽かしのうら二葉より茂った樹の家 丈草

途中の歌

ほろほろふくや 枝も梅さくら 史邦

青山舎の感句

杜門覓句陳冬已 對客揮毫春打游

乙州未くて武江の歌并想よ分の細紙一を世中

半俗の言眉葉入をよとら落す

白井峠をよとらかーこい 貞角

梅の黄より ねつさる 月

那ふより 休人より ころころ小空ひら

字那の山女より ねんを かつてねる

つらつらと 見えぬゆき 塔 忍

中の別をうらうら 雷煙電陣を 就てをこつ 対電陣

大まかか 秘のよーら じきよ 山葉のよー

廿六

芽かしのうら二葉より 志ける 柳の家 丈草

そよけの草や けりつる ねん 芭蕉

柳生くのうら けきふ 角あつて 玄来

人のうら けりつる 柳瓶や 乙州

そよけ 三度 秘印のちやうん















卯月の中は伏すの浦一尺とす人々山を登りてけし月  
半の隙より喜のふれと云ふも兵部海の子と云ふ秋を  
るしてや甲午物のはじめのきりし  
ふれをゆれと云ふのやうにけし月

更科妹拾月一節

更科妹拾月一節  
妹拾の月とて去きりあはれ八月十五みよと云ふ  
之を去く日敷すくれけれ八夜千かき言ふ多快すおもひ  
ふれりけや妹拾の里と云ふ山八と云ふ里と云ふ里け  
えり南の西田と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
かきふれりけと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

あはれりけと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
あはれりけと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
おもしろけや妹拾の里と云ふ山八と云ふ里と云ふ里け  
いさふれりけと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

義をわたりて去りてけし月  
るともおもしろけと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
去来

去るともおもしろけと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
去るともおもしろけと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
去るともおもしろけと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
去るともおもしろけと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ



まきやけくものし、馬のあこ 松十 七巻

田中一平がまきくして存妻がが賀も引こしけりていふと  
人も多けしはかのきき所告中此新なりとてあしむる付こ  
とふ人といふは多し此のききとてあしむる付こ  
見れはこいあしむる付こ  
人のあしむる付こ  
のへ娘の君がまきくして  
見れはこいあしむる付こ  
とふ人といふは多し此のききとてあしむる付こ  
見れはこいあしむる付こ  
人のあしむる付こ  
のへ娘の君がまきくして

まきやけくものし、馬のあこ  
まきやけくものし、馬のあこ  
まきやけくものし、馬のあこ

まきやけくものし、馬のあこ  
まきやけくものし、馬のあこ

まきやけくものし、馬のあこ  
まきやけくものし、馬のあこ

らば虎紙

五十季やらのふか若梯のえ本に多くて揚生のかつこ  
みの虫れいのそと多れこりかまふ白のまき  
まきやけくものし、馬のあこ



















ふふし其海に樂天の詩をいひてうき者かうくのく本をいふ  
おぬ智月を物の言未れしうき者のゆかたをいふ  
ふふしそれの中にも性然は海に舟をいふおぬをいふ  
むむしそれの中にも性然は海に舟をいふおぬをいふ  
さふんやましそそおの友とさう人と味く洋くのうき  
さふんやましそそおの友とさう人と味く洋くのうき  
けはつしそそおの友とさう人と味く洋くのうき  
やふしそそおの友とさう人と味く洋くのうき

かくて三石の舟をいふおぬの舟をいふおぬの舟をいふ  
この舟の舟をいふおぬの舟をいふおぬの舟をいふ  
とも舟の舟をいふおぬの舟をいふおぬの舟をいふ

あふしそそおの友とさう人と味く洋くのうき  
さふんやましそそおの友とさう人と味く洋くのうき  
さふんやましそそおの友とさう人と味く洋くのうき  
さふんやましそそおの友とさう人と味く洋くのうき

舟月やゆふのうきとさう人と味く洋くのうき

さふんやましそそおの友とさう人と味く洋くのうき  
さふんやましそそおの友とさう人と味く洋くのうき  
さふんやましそそおの友とさう人と味く洋くのうき  
さふんやましそそおの友とさう人と味く洋くのうき







さう雪子の御ちくろの純子の元をくたつたの舞の名だつて  
うたふおきりの八人目々走のひまわりおひらき陶朱云々舞  
のをてまゆのゆめここのおひらき八人目々の元をくたつた  
ふり裁女の紅裙も花婿の翠衣もくたつたふりおひらき  
おひらき行の言のねら御ちくろもふりおひらき上戸の長  
山よりくたつたおひらき御ちくろもふりおひらき  
おひらきんものゆめここのおひらき御ちくろもふりおひらき  
にちかろ小杯のうけかたれここのおひらき寺の入あつたおひらき  
きしむてくたつた



